

日本一への苦悩

5年前の鳥取全共。南那珂地域には焦りがありました。種牛の部で過去1度も県代表になれずにいきました。JAはまゆづの奥村友博さんは当時を振り返ります。「悔しかった。出品技術に相当な差がありました。恥ずかしいと同時に、先人たちに申し訳ないという気持ちでいっぱいでした」。

その後、小林や高千穂といった先進地に技術員を派遣し、多くのことを吸収しました。「技術はもちろん、精神面で学ぶことが多かった。牛に対して責任感を持って臨むようになりましたね。良い刺激を受けました」。

その努力が実を結んだ、日本一。精神的に支えてくれたものがありました。「先人たちの思いは、いつも感じていました。厳しい指導をしてくれた先輩たち。自分たちを信じてくれた農家の皆さん。彼らがいたから、今の自分たちがある。そう思っています」。

次回からは追われる立場になった南那珂。「日本一にあぐらをかいていると言われぬように、今後の県の共進会などで負けるわけにはいきませぬね。これまでに以上に頑張ります」。

日本一の市場にしたい

1人の消費者として、わたしたちにもできることがあります。

「年6回、南那珂地域家畜市場で開かれる子牛の競り市で、南那珂地区の牛肉を買うことができます。多くの人に安心・安全で確かな品質の串間の牛を口にしてほしいですね。今後は店頭にも『串間産』の牛肉を並べるなど、もっと気軽に『日本一の肉』を味わえるようにしたいです」。これからの目標を聞くと、「南那珂地区を日本一の市場にしていきたいです」。力強い言葉に、先人たちの思いを受け継いだ姿を見ました。

先人たちの思いをいつも感じていた

JAはまゆづ畜産部畜産業務課 課長補佐

奥村 友博さん

長崎全共での日本一を支えた技術員のリーダー。



南那珂の畜産 その歴史の重みと 現在の姿

絆を大事にしてほしい

元JAはまゆづ畜産部 長年南那珂の畜産を見守ってきました。全共の日本一を見届け、10月末に退職。

中山 満彦さん



共に歩んだ歴史

今回の全共に向けて第4区は、県内すべての地区で『美福10』という種雄牛の系統牛から選出しました。1970年代に活躍し、県内の牛の資質・品位の向上に大きく貢献。初めて貸し出されたのは南那珂地区でした。その歴史を知る中山満彦さんはこう話します。「美福10が導入されたことで南那珂の畜産は一気に変わりました。また、串間で産まれた隆美号という牛は、その特色を最も色濃く引き継ぎ、広く伝えることに貢献しました」。

南那珂地区ではそれらの優秀な血統を守りつつ、長年改良を重ねてきました。「牛の改良は成果が出るのに最短でも7年という多くの時間が必要なんです。農家さんにとってはデメリットの方が大きい。それでも協力してくれる農家さんたちの理解があつてこそできることなんです。上手く時代の波に乗れず、子牛が売れない時期もありました。県の共進会に出られなかったときは悔しくて、情けなかった。だからこそ今回の全共での日本一という成績は、本当にうれしかった。みんなの思いが花開いたのですから」。

絆を胸に

今回の日本一という快挙。若い世代の技術員が大きく貢献しました。「技術面ではわたしはもう、かないません。今回の経験でまた大きく成長したことを思います」。彼らの今後を語るとき、中山さんの目には涙がにじみます。「何よりも絆を大事にしてほしいですね。それは農家との絆であり、技術員同士の絆、牛との絆。人と人、人と牛がつながっていないければ、畜産は成り立たないということを忘れないでほしいです」。中山さんの言葉は、南那珂の畜産が歩んできた歴史を映すかのように、重みあるものでした。